

2011.1.27

エネルギー経済調査部

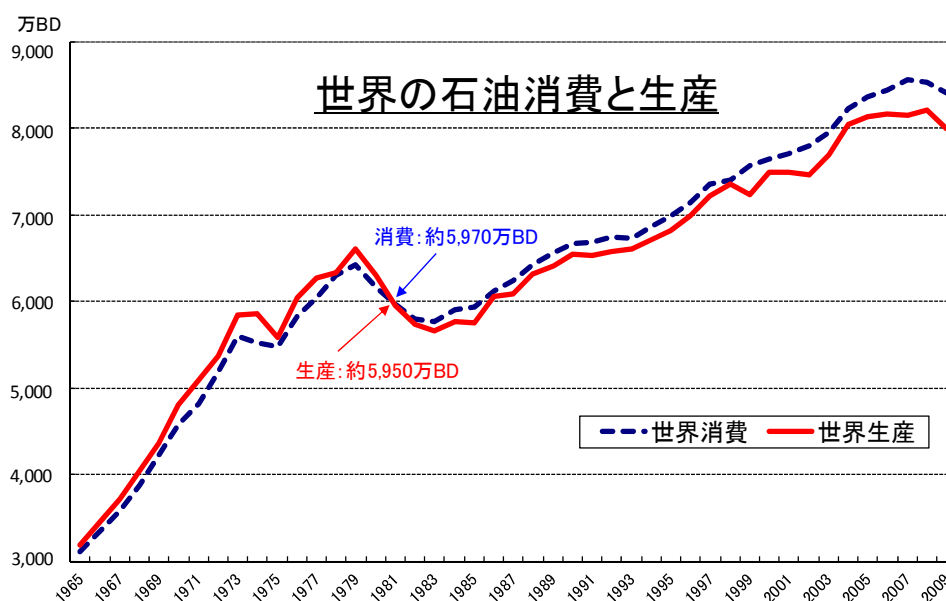
若生 芳明

## 『BP統計』が示唆するもの

BP が毎年 6 月に発表している *BP Statistical Review of World Energy* は、日本では『BP 統計』の略称で広く知られている。この『BP 統計』は、1951 年に BP 社員向け配布資料として初年度版が発行されたものだが、2010 年度版の発行で 59 回を数えた。

エクソンモービルやシェルが将来のエネルギー需給見通しを公表している<sup>注1</sup>のに対し、『BP 統計』で公表しているのは過去のデータであることから、「BP は過去のデータしか出さない会社」<sup>注2</sup>などと悪口をたたかれた時期もあった。しかし、「継続は力なり」を地で行く『BP 統計』は、今では世界のエネルギー・アナリストや各国政府のエネルギー政策担当者、研究機関などが、IEA（国際エネルギー機関）の各種報告書と並んで利用する、エネルギー統計基礎データとしての主要な地位を確実に築いている。

下のグラフは、この『BP 統計』が提供する石油の世界生産（Production）と世界消費（Consumption）の年次データをベースに作図したものである。これを見ると、1970 年代の 2 回のオイルショック時のように生産と消費が減少した年はあるものの、1965 年以降、世界の消費も生産も概ね右肩上がりが増加したことがわかる（2009 年は世界的な景気後退の影響で生産も消費も減少）。



〔 出所：BP Statistical Review of World Energy 2010 のデータ  
から筆者が作図 〕

しかし、生産と消費の動きを注意深く観察すると、興味深いことに気付く。1980年までは生産が消費を常に上回っていたが、1981年に消費（約5,970万BD）が生産（約5,950万BD）を追い抜いて以降、『BP統計』では世界生産が世界消費に追い付いたことは一度もなく、むしろそのギャップ（消費に対する生産不足）が拡大していることを示している。

これは、もちろん、トータルの世界供給が世界需要を満たしていないことを意味しているわけではない。IEAが公表するデータに代表されるように、実際の総供給量には、原油とNGLsの生産量以外に、プロセスゲイン、バイオ燃料、GTLなどの生産量が含まれるため、現実の需給バランスとしては、供給は需要を満たしている（在庫取り崩しも含む）。

一方、『BP統計』の生産に含まれるのは、原油＋シェールオイル＋オイルサンド＋NGLsの生産量だけで、その他の供給源は含まれていない。したがって、シェールオイルとオイルサンド生産量が含まれているものの、『BP統計』の言う生産は在来型石油生産量と捉えるとわかりやすい。

『BP統計』を読み解くと、在来型石油生産で世界の石油消費を賄っていたのは1980年までであり、1981年以降は、在来型石油生産を供給のベースとすると需給バランスはタイト化の一途を辿ってきた — すなわち、在来型でない石油供給がその不足分を補ってきた — という現実の姿が浮かび上がってくる。『BP統計』は長年にわたって「在来型の石油生産では世界消費を賄いきれていない」ということを愚直に指摘してきたことになる。

上述したように、通常、総供給量と言うときの数字は、非在来型供給（石油に由来しない供給源も含む）を含めているため、一般的なデータでは、『BP統計』が示唆している事実はその数字の裏に隠れてしまう。その意味では、在来型石油生産量のみを“生産”として公表している『BP統計』のデータはユニークである。

前世紀は「石油の世紀」と言われた。しかし、21世紀に入り最初の10年が経過した今、前世紀にほとんど注目されることのなかった非OECD諸国が、世界の石油需要増の牽引役となっている。言わば、新たな「石油の世紀」が到来し、石油の便利さと手軽さが改めて確認される状況である。それにもかかわらず、在来型石油生産が需要の増加に追い付いていないという状況は、何とも皮肉なことである。

注1 エクソンモービルは“Outlook for Energy – A View to 2030”を公表している。シェルは“Shell energy scenarios to 2050”を発表している。

注2 *BP Statistical Review of World Energy*が今年60周年の記念の年を迎えるに当たり、BPはこれまで社内資料としてきた*BP Energy Outlook 2030* (BPによる2030年までのエネルギー長期予測) を2011年1月19日に初めて公表した。